

ポスト近代の総合知を求めて —文理融合による海外交流—



海外交流

宮原 暁*

Toward Multilocal Knowledge in the Postmodern Era:
Memetic Exchanges with a Collaboration between Humanities and Sciences

Key Words : grand narrative, multispectral imaging technique, meme, cultural heritage

「大きな物語」の再考

過去の遺物が文化的な遺産となるためにはストーリーやコンテキストを必要としている。しかしながら、人間の文化的、生活的活動によって生み出され、残されたモノのほとんどはストーリーやコンテキストがはっきりしないことが多く、「発見」も「発掘」もされずにその場にうち捨てられている。これまで埋もれてきたこのような過去の遺物を、ミーム(meme)の観点とイメージング分光技術を用いて新たなストーリーやコンテキストを発見しようというのが、目下、フィリピンやベトナムなど東・東南アジアのカウンターパートとともに、私たちが大阪大学大学院人文学研究科とレーザー科学研究所(猿倉研究室)において進めようとしているプロジェクトである⁽¹⁾。

これまで文化的な遺産を歴史的、文化的に価値あるモノたらしめてきたストーリーやコンテキストは、フランソワ・リオタールが「大きな物語」(grand narrative)と呼んだ近代社会の歴史叙述であった。リオタールによれば近代社会の科学や歴史叙述は起源神話や宗教的教義と同様、ストーリー・テリングの形式を備え、近代社会の啓蒙主義的、進歩主義的価値観を正当化するとされる⁽²⁾。歴史的、文化的価値を持つ遺物は、そうした「大きな物語」によって、過去のある時期においてではなく、現代において、

もっと言えば現代の国家にとって価値のあるストーリーやコンテキストを与えられたことで、価値を持つモノなのである。

これに対して私たちのプロジェクトが着目するのは文化的な遺産とはならなかった埋もれた遺物である。たとえば東アジアの陶磁器の研究では、往時の陶磁器製作を今日の「文化財」の定義に照らして解釈する傾向があった。このため雑器よりも精品、複製よりもオリジナル、破片よりも無欠完品が分析の対象とされてきた。「粗悪品」「複製」「破片」など、無数にある一つ一つのピースに光をあてることで、別のストーリーが見えてくるのである。

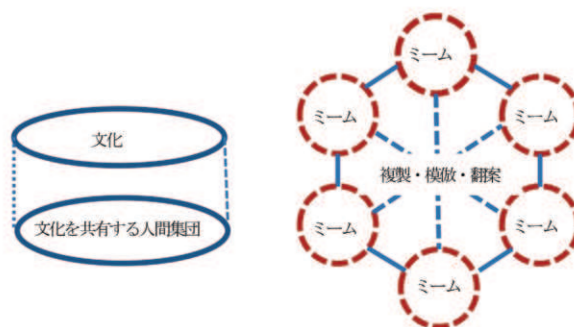
ミームとイメージング分光

これまであまり着目されてこなかった過去の遺物を再発見するため、私たちが導入しようとしているのは文化的情報、すなわちミームという観点と、イメージング分光の技術である。ミームの概念は進化生物学者のリチャード・ドーキンスが生物を形成する情報としての遺伝子との類推において主張した概念で、慣習や技能、物語など、人から人へ複製、ないし模倣されていく文化的情報を意味している⁽³⁾。ミームの概念を採用することで中心的な価値観の共



* Gyo MIYABARA

1964年12月生まれ
東京都立大学大学院人文学研究科社会
人類学専攻博士後期課程中退(1996年)
現在、大阪大学大学院人文学研究科外国
学専攻 教授 博士(社会人類学)
専門/社会人類学
TEL : 072-730-5390
FAX : 072-730-5390
E-mail : miyabara.gyo.hmt@osaka-u.ac.jp



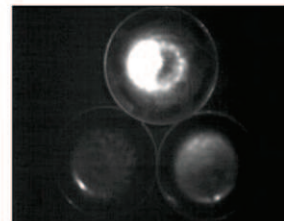
図：従来のモデルからミームの伝達モデルへ

有を前提とする文化の概念を相対化し、集団や社会の境界を越えて文化的な情報がどう伝達され複製されるのかを明らかにすることが可能となる。

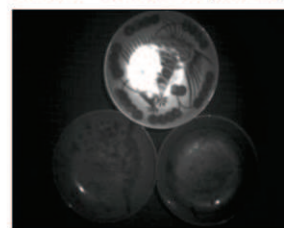
イメージング分光の技術はこうしたミームとしてうち捨てられたモノたちを再定義し、そこから仮説をたてるのに威力を発揮する。人文科学の客観性は認識論的・間主観的である。文化を外から観察する研究者の視点ではなく、その時代、その場所を生きる人びとの視点（person in the culture の視点）を重視する。例えば虹の色に関して自然科学では連続した光の波長を数値として計測する。これに対して人文科学は、それを人の認識に即して記述しようとする。人が虹として目にするものに大きな違いはないが、それをいくつの色に区別するかは文化によって社会によって異なってくる。例えばフィリピンのある民族は虹を16色区別する。日本では6色である。アフリカにはとりあえず虹に関しては2種類の色しか区別しないところもある。人文科学では文化や社会によって区別の仕方が異なる点を重視するのである。

とは言え文化の研究に観察者の視点がまったく必要ないかと言えばそうではない。とりわけ過去の遺物の評価などでは自然科学の視点が不可欠となる。その時代、その場所を生きる人びとの視点を明らかにするためにはコンテキストに即した解釈が必要だが、コンテキストというものは直接触れることができない。リアルタイムに資料を分析する場合は参与観察に基づくフィールドワークによってある程度コンテキストに近づくことが可能になる。しかし、人びとの過去の暮らしを伝える遺物の分析にはこの方法は限定的にしか用いることができない。そこで必要になってくるのが思いもよらないファクターを探し出すための分析的なツールなのである。

イメージング分光の技術はそうした分析的なツールのなかでもとりわけ有望な技術の一つである。過去の遺物を評価するためのツールには、これまでそれが出土した地層による年代判定やDNA鑑定、カーボン14年代測定等があった。しかし、これらのツールは測定できる年代の幅が長すぎたり、資料の破壊が必要だったりという問題もあった。テラヘルツ、OCT等のイメージング分光技術は微小な違いを、しかも非破壊で区別することのできる文字通り新たな光である（写真1）。



マルチスペクトル画像 (250 nm)



マルチスペクトル画像 (350 nm)

写真1：
マルチスペクトル画像では
人の目に見えない釉薬の違いを
区別することができる。
（猿倉研究室提供）

イメージング分光で可能になること

イメージング分光でどのようなことができるようになるのだろうか。陶磁器の破片や書画に押された朱の落款などの無機物はイメージング分光による分析に適している。写真2は、今回、私たちのプロジェクトが分析の対象にしようと考えている陶磁器の破片である。これらの破片はフィリピンのセブ市パリアン地区にある1730年に建てられた旧イエズス会士宅（Jesuit House）の地下から2010年に見つかったもので、景德鎮や同安窯、徳化窯、漳州窯、有田内山などで製作されたとみられる比較的大きな破片に加えて、2万点はあるかというそれよりずっと小さな破片が含まれている。これら破片の一つ一つを分析することはこれまで技術的に不可能であり、意味のあることだとも考えられてこなかった。マルチスペクトルイメージングは深層学習と組み合わせることでそうした手間のかかる分析を可能にし、なおかつこれまで全く想定されてこなかった新たな



写真2：見つかった陶磁器片の一部

知見を提供し得る。次にあげるものはそのうちのいくつかである。

- (1) 陶磁器の由来について、景德鎮、福建、肥前などの生産地についてはこれまで絵柄などに基づいて判断されてきた。破片のひとつひとつに光をあてることで、破片の個性をさらに詳細にカテゴライズすることが可能となる。もちろんそれは誰が作ったのか、どの窯で焼かれたかなどを個人や個別の窯のレベルで特定しようということではない。一つ一つの破片の絵付けや釉薬の使い方を分類することで、セブで出土した陶磁器を作った職人や窯の個性を区別し、職人 A が作った陶磁器の割合がいくら、窯 A で焼かれた皿の割合がいくらといったことを明らかにしようというのである。
- (2) イメージング分光技術は破片に占める高級品一雑器の割合、元から破片であったモノと、皿などが割れて生じた破片との割合を明らかにすることも可能になる。そうしたことがわかってくるとセブに持ってこられた器の用途や、なぜ破片がこの場所に埋められたのかということについても仮説を立てることが可能となる。
- (3) 色についての分析はイメージング分光分析のもう一つの柱である。コバルトや辰砂、鉄などの産地についてはおおそわかっているが、質の異なる原料がどのように使用されているかを分光分析することで製作者がどのようなことを意図して異なる原料を用いたのかについて知ることができる。また製法が複雑な赤絵については、製作者にとって何が成功で何が失敗だったかについて仮説を立てることができる。
- (4) 「文様」と「文字」の分析にも分光技術は力を発揮する。剥落した上絵の文様や文字は肉眼では見えにくい、光技術を用いることで判読しやすくなる。また職人は皿や碗に文字に似た文様を描くことがある。光を当てることで文字が読めるようになるわけではないが、分光によって描線の順番を区別することができれば、この文字を書いた人が文様を文字として書いたのか、模様として描いたのかにつ

いて仮説を立てることが可能となる。

ポスト近代の国際交流と総合知の未来像

無数の陶磁器片が見つかった旧イエズス会士宅は、現在、Ho Tong Hardware という企業の倉庫になっている。陶磁器片の発見後、オーナーのジミー・シー氏は倉庫の一部をギャラリーに改装し、Museo Parian de Sugbo (Jesuit House 1730) として一般に公開している。コロナ・ウイルス感染症の拡大によって中断しているものの、筆者はセブの華僑華人を研究する人類学者として、またシー氏の友人としてこのギャラリーの展示品の整備に他の専門家とともに関わってきた。その成果の一つは長崎大学の野上建紀先生や福建博物院の栗建安先生の知見を借りて比較的大きな破片の産地を特定したことである。そのなかには 17 世紀後半に有田内山で作られたチョコレートカップも含まれていた (写真 3)。このチョコレートカップは飲料としてのチョコレートを飲むためのカップで、同様の磁器はマニラと交易ルートで繋がるメキシコでも発見されている。カカオの胚乳を粉碎・焙煎して飲むのはスペイン征服以前のメキシコの習慣であり、やがてヨーロッパでブームとなるのだが、東アジアから輸出されたチョコレートカップは欠くことのできないアイテムであった。



写真 3：セブ市で見つかったチョコレート・カップ

だが筆者の関心はおそらくは歴史的、文化的な価値が高いチョコレート・カップよりも、当初から小さな破片の方に向けられていた。他の破片と繋ぎ合わすことのできないおびただしい数の破片を目にして、それが割れた皿や碗に由来したものばかりではなく、はじめから破片としてこの場所に運ばれてきたように見えたからである。歴史的、文化的価値を持つとされる文化財を文化財たらしめているのは近

代国家の「大きな物語」である。それゆえ文化財の国外の持ち出しは禁じられている（現地に機材を持ち込んで分析することができるイメージング分光技術はこの点でも威力を発揮する）。これに対して文化的な遺産とはならなかった過去の遺物は近代国家においてストーリーやコンテキストを与えられなかったモノたちである。

そこで発見される新たなストーリーやコンテキストは、人文科学と自然科学の「大きな物語」が再考される契機にも、また国家の威信と強く結びついた文化財という考え方を見直す契機にもなる。イメージング分光技術の助けを借りて無数の小さな破片から小さなストーリーを読みとっていくことはじつに些細なことのように見える。しかし、それは歴史的

にはチョコレート・カップの移動をめぐる大きなストーリーとは異なった東アジアにおける地域間のダイナミックな繋がりを実感させるものであり、また今日的には近代といういささか窮屈な枠組みを克服した海外交流、さらには総合知の未来像を示してくれるのである。

注

- (1) 本海外共同研究は大阪大学レーザ科学研究所と人文学研究科の文理融合プロジェクトである。
- (2) リオタール、ジャン＝フランソワ『ポスト・モダンの条件』水声社、1986年。
- (3) ドーキンス、リチャード『利己的な遺伝子』紀伊國屋書店、1991年。

